

テキストの照応関係について

— ニュース番組と大学講義を比較して —

小野正樹

【キーワード】 結束構造 が/けど テキストの形式 テキストの内容 指示語

1. はじめに

テキストの構造については、従来さまざまなアプローチから研究されてきた。文体論では、テキストの伝達目的の分類やテキスト全体の構成（段落や段落構成）の分析を目指したが、語句の運用など、語句自体の機能的な面への言及は少ない。一方、ベケシュ(1987)は、グラフ理論を用い、語句を手がかりとしてテキストの内容的なまとまりをインフォーマントの実験調査から計量的に追究した。認知的なテキスト研究である。また、重松/長谷川(1987)では、日本語教育の聴解を前提として、ノート・テーキングの技能から、(1)ニュース朗読 (2)論説・講演 (3)大学講義の三種類にテキストを分類している。この主張は、ニュース・朗読は、そのままディクテーションすれば書いた文になる一方で、大学講義は、必要な情報の取捨選択と論理的整理を行い、聞き手が文を作っていかなければならないものだとしている。つまり、聞き手が判断して、日本語として内容的まとまりを構築しなければならないわけである。では、ベケシュ、重松/長谷川の指摘するテキストのまとまりは、実際にどのような言語形式で構成されているのだろうか、これをはかるのが結束構造である。結束構造について、Beaugrande/Dressler (1981邦訳1984:6)は、「表層テキストの構成要素が一つの連鎖の中で相互に結合されている仕方」と定義しており、本稿では、その結束構造の中で、照応関係に注目して、ニュース番組の照応の方法を観察し、さらに大学講義との比較を行い、それぞれの特徴を明らかにする。重松/長谷川(1987)で指摘されているジャンルの異なりを計量的に実証するのが本稿の目的である。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

談話の照応に関する先行研究として、省略の観点から分析した久野(1978)や、主題と照応関係にある名詞句の距離を計量的に扱ったGivón(1989)がある。これらは、主語の性質や文法的格から調査したもので、統語論の立場からのアプローチであり、本研究のようなテキスト

のスタイルを分析するものではない。反対に、文法現象の多様性を積極的に認めて、テキストのスタイルを追究したものに、Beaugrande/Dressler (1981) やHalliday/Hassan (1985 笈壽雄訳1991)がある。ここでは、文法的に適格だと判断された文と文の隣接関係やテキスト全体の構造の分析を行っている。特にHalliday/Hassan (同:76) では、あるテキストにおいて、筋道が通ったものであるための意味的関連要素を結束構造の要素と説明し、その要素に1.指示 2.代用 3.省略 4.接続 5.語彙的な結束の五つを挙げている。

テキスト内の意味的関連要素	
結束構造の要素	1. 指示 2. 代用 3. 省略 4. 接続 5. 語彙的結束

図1 結束構造の要素 (Halliday/Hassan 1985 邦訳1991)

本稿では、それぞれのテキストの表現形式の違いを追究するために、特に照応に関わる指示、代用、および省略についての観察を行った。この立場からの調査に西原(1990)があり、英文と日本語文の同内容のニュース記事を比較した結果、日本語では同一語の繰り返しが多く見られる一方、英文では同一指示対象でありながら、異なる表現を用いて繰り返しを避ける傾向があると報告している。

本研究の目指すところは、テキストの形式とテキストの内容の二つの観点から日本語の表現を観察することである。テキストの形式については、ニュースという予め準備された原稿を読む形式と大学講義のように整えられた原稿を用いることなく専門知識を説明する形式の違いが、表現形式にどのように影響を与えるのか、また、テキストの内容については、ニュースという一般人対象の内容と、大学講義という専門知識を有する聞き手に対しての内容、さらに専門知識の中でも、理科系内容と文科系内容という異なったジャンルと表現形式には関係があるのかを追究するわけである。

3. 調査概要

3-1 調査資料

ニュースの資料として、1995年2月に『NHKニュース7』を4日間録画し、文字化したものを利用した。『NHKニュース7』は、夕刻7時からの約1時間のテレビ番組である。また、大学講義のデータには、筑波大学構造工学分野の4講義と言語学分野の4講義(各講義

75分間)を録画および録音したものを文字化し、資料とした(1)。なお、講義の形態は、学生が教員の講義を聞いてノートをとるものである。以下、本稿中の記号Nは『NHKニュース7』、記号Rは理科系の構造工学分野の講義、記号Bは文科系の言語学分野の講義を示している。

3-2 調査箇所

接続語「けど／が」の前後の照応関係を分析した。この箇所を選んだ理由は、次の二点を予想するからである。

(仮説1) 接続語「けど／が」は、書き言葉に較べ、話し言葉で多用されるので、話し言葉の特徴が現われやすい。

(仮説2) 接続語「けど／が」は、元来、逆接を表わす語であったが、話し言葉では、電話の会話の冒頭で使われる「もしもし、〇〇ですが、」のように、逆接語としての機能は低く、いわゆる終止形の形式よりも、発話者はその後に続けて何らかの発話意図を持っており、「けど／が」の前後の隣接する文に結束構造の要素が現われる。

従来、「けど／が」は、「接続助詞」と「終助詞」の2種認められている(『日本語教育事典』)が、談話では、文の単位の認定と絡み、両者の明確な区別は難しい。「接続助詞」は、文をつなげるもので、「終助詞」は、文を終えるための機能を備え、両者は反対の性質だが、倒置文や言い直し、不完全な文に「けど／が」が結びついた場合には、いずれか判断できない場合があるからである。そのため、本研究の立場は、形式的に文を区切ることを目的とせず、いかに内容的に文が続いているかを見ている。また、「が」と「けど」両者を取り上げたのは、データの観察から両者の使い分けは、文法的問題や場面性よりも、個人差に起因すると判断したからである(2)。この調査部分を図式化したものが図2で、S1が「けど／が」に先行する文で、S2が後続する文であることを示している。

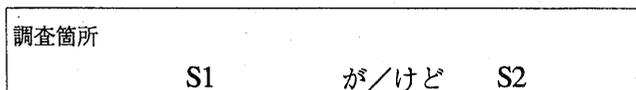


図2 本調査の調査箇所モデル

なお、本稿では、1つ以上の名詞と述語が結びついたものをSとして扱い、もしS1とS2の両者に照応関係が認められるなら、どのような要素が選択されて、情報が流れているのかを観察したのである。

4. 分析

4-1 分析基準と表記

Halliday/Hassan(1985)で提案されている、結束構造の要素の1.指示 2.代用 3.省略 5.語彙的な結束について、照応関係になり得るS1とS2の要素のパターンを見ると、(a)同じ名詞の繰り返し、(b)違う名詞句での置き換え、(c)指示詞での言い換え、(d)ゼロ記号の使用の四とおりがあつた。以下に分析の基準を挙げる。

(a)同じ名詞の繰り返しを [名→名] とした。また、同じ対象を示していても「私」と「僕」のように違う語を用いる場合には、(b)違う名詞句での置き換えとし、[違名]と記述した。そして、実質的に同じ対象を示していても、コ系ソ系ア系の(c)指示詞へ言い換える方法もある。

(1)係数がますます、あの一、複雑化いたしますけれども、それ手計算でやろうなんて思わないわけです (R2)

例文(1)は、S1内で、「係数」と名詞で表現されているが、S2では、ソ系の指示語「それ」で述べられている。このパターンを [名→そ] と以下記す。同様に、「これ」「あれ」で述べられている場合には、[名→こ] [名→あ] とした。また、「この係数」のような「指示語+名詞」の形態を [こ名] と処理した。同様に「その+名詞」は [そ名]、「あの+名詞」は [あ名] と表記する。次に、(2)は(d)ゼロ記号(以下記号「 ϕ 」で表す)の使用例である。

(2) 初版本はケースに入ってるんですけども、今(ϕ)なくなって (B3)

S1内で「初版本」と表されたものが、S2ではそれに対応する語句の存在が認められない。しかし、S2の命題事実は「今初版本がなくなった」ことで、故にゼロ記号での表現と判断し、これを [名→ ϕ] とする(3)。また、[名→こ]に対して [こ→名]のように、後方照応も論理的に可能で、データからも観察された。

照応関係の要素のパターン (順列・組み合わせは自由)	S 1		S 2	
		名詞 異なる名詞 指示詞 (コ・ソ・ア) ゼロ記号	けど/が	名詞 異なる名詞 指示詞 (コ・ソ・ア) ゼロ記号

図3 本調査の照応関係の要素のパターンの可能性

以上、照応関係のバリエーションを見たが、S1とS2内の項に照応関係が認められない場合もある。

(3) あの第2章までは言いましたけど、第3章というのはですね (B3)

(3)は、全体のテーマとして、ある本についての言及だが、S1とS2内の名詞句に照応関係が認められなく、同一指示対象にある要素がない(4)。この場合を「無関係」とする。

4-2-1 分析結果(1) ニュース番組の場合

4-1の基準に基づいて、ニュース番組で認められた照応関係のパターンの高いものを順に、「けど」、および「が」それぞれの場合に分けて示したものが表1である。

表1 ニュース番組に見られる照応関係の要素のパターンの順位

けど			が		
順位	現象の種類	実数	順位	現象の種類	実数
1	無関係	29	1	名→名	4
2	名→名	23	2	名→違名	2
3	名→φ	15		名→φ	
4	名→違名	7		名→こ名	
5	名→こ名	3	5	無関係	1
				名→こ	

接続語「けど」に較べて、「が」を含んだ環境では、わずかしか認められなかった。「けど」の環境では、「無関係」が最も多く、続いて「名→名」、「名→φ」、「名→違名」、「名→こ名」と続いている。一方「が」では「名→名」のパターンが最多値で、実数4であった。続いて「名→違名」「名→φ」「名→こ名」が実数2で、「無関係」「名→こ」が実数1であった。

次の(4)は、「けど」および「が」の両方で上位にある同じ名詞の繰り返し「名→名」の例である。

(4) 次は国会の動きですが、国会は衆参両院の本会議で平成6年度の第2次補正予算案について審議を行ないました。(N1)

西原(1990)の調査は、書き言葉ではあるが、ニュース雑誌の日英対照分析を行い、英文の記事では同一名詞句の繰り返しを避ける傾向に対し、日本語のニュース記事は、同一名詞の繰り返しが多いと述べているが、同様の結果を得た。このように、名詞句を用いて表現していることは、テキスト自体が非常に明示的であると言えよう。重松/長谷川の指摘するように、ゼロ記号が多ければ、聞き手はそれを補いながら文章を構築しなければならないが、明示的な場合には、その過程は必要ではない。

この他、ニュース番組の特徴として、コ系指示語の使用がわずかに認められたが、「そ

れ」などのソ系指示語および「あれ」などのア系指示語が、照応関係を持たない点も挙げられる。ニュースの照応関係の特徴は、次の二点である。

- I ニュース番組の特徴 ① 同一名詞の繰り返しの多用
 ② ソ系指示語およびア系指示語の非使用

4-2-2 分析結果(2) 大学講義の場合

理科系の大学の講義を、ニュース番組と同様の処理をしたものが、表2である。

表2 理科系に見られる照応関係の要素のパターンの順位

けど			が		
順位	現象の種類	実数	順位	現象の種類	実数
1	無関係	64	1	無関係	37
2	名→こ	31	2	名→こ	15
3	こ→こ	19	3	名→名	14
4	名→名	17	4	こ→こ	13
5	名→違名	9	5	名→ ϕ	8
	名→そ	9	6	名→そ	6
7	名→ ϕ	8	7	こ→ ϕ	5
8	こ→ ϕ	6	8	名→こ名	4

「けど」と「が」を較べると、[無関係]が共通して最も多いだけでなく、多少の頻度の順位は異なっても、同じ照応関係のパターンが上位を占めており、[名→こ]、[こ→こ]、[名→名]、[名→そ]、[名→ ϕ]、[こ→ ϕ]が共に認められる。ニュース番組に較べると、指示語の使用が多くなり、コ系指示語の連続や、ソ系指示語の使用されていることがわかる。またニュースでは見られなかったゼロ記号表現も現れている。データを観察すると、指示語の中でコ系指示語の多い理由の1つに、場面指示の用法に気がつく。発話内の言語的要素を指示する文脈指示ではなく、可視的なものを指示対象とする用法が目についた。理科系講義では、教科書や本を用いるのではなく、図形や数式を直接聞き手に示す形態が頻繁にとられており、その際の表現形式の例が(5)である。

(5) Zは車両の横方向、ここにありますが、これが上下方向を表す(R3)

この例では、「Zはここにありますが」と黒板上を指していて、さらに接続語「が」以後で、「これ」と続けて述べている。

II 理科系の特徴—① コ系指示語の多用

次に、文科系の大学講義で認められたものが、次ページの表3である。ニュース番組や理科系と較べて、非常に多種多様なパターンが観察できた。先の二つのデータと同様に、明示

的な [名→名] も多いが、理科系では [こ→こ] の指示語の連続しか見られなかったのに対して、[そ→そ] という例 (6) のように、ソ系指示語の連続が目立つことも特徴的である。

- (6) それをいろいろやっけていくなだけれども、それが一体どういう意味を持つかってことが自分で把握できないことがあるんです(B1)

表3 文科系に見られる照応関係のパターンの順位

けど			が		
順位	現象の種類	実数	順位	現象の種類	実数
1	無関係	100	1	無関係	42
2	名→そ	36	2	名→こ	13
3	$\phi \rightarrow \phi$	33	3	こ→名	10
4	名→ ϕ	30	4	$\phi \rightarrow$ 名	9
5	名→名	19	5	名→ ϕ	8
	こ→ ϕ	19	6	$\phi \rightarrow \phi$	8
7	そ→そ	17	7	名→名	7
8	こ→名	15	8	こ→こ	6
9	$\phi \rightarrow$ 名	13	9	名→そ名	4
	名→こ	13		こ→そ	4
11	こ→こ	9		$\phi \rightarrow$ こ名	4
12	名→そ名	8	12	名→違名	3
13	こ→そ	7		名→そ	3
	そ→ ϕ	7		名→こ名	3
	$\phi \rightarrow$ こ	7		こ→ ϕ	3
16	$\phi \rightarrow$ そ	6		そ→そ	3
17	そ→こ	5		$\phi \rightarrow$ そ	3
18	そ→名	4	18	$\phi \rightarrow$ こ	2
19	名→違名	3	19	$\phi \rightarrow$ そ名	1
	$\phi \rightarrow$ こ名	3			
21	名→こ名	2			
	名→あ名	2			

結果から理科系では、ソ系指示語の使用が少ないのに対して、文科系では多いことがわかる。又、理科系でもわずかに見られたゼロ記号は、文科系では非常に多く、[$\phi \rightarrow \phi$] (5) が「けど」「が」両者の環境で見られる。さらに、接続語の前にゼロ記号が現れる [$\phi \rightarrow$ 名]、[$\phi \rightarrow$ こ]、[$\phi \rightarrow$ そ] という現象は、先の二つのデータには現れなかったが、(7) は、その例である。

- (7) あの別に(ϕ が) 開いてたって構わないんですが、たいていは次のまという音に引かれて□が閉じている(B2)

また、指示詞の用法に関して、ニュース番組および理科系データでは、指示詞の指示対象が前方にある前方指示だけであったが、[こ→名]、[そ→名] のように後方照応の用法も少なくない。例文 (8) は、その例である

(8) これは、ちょっとノンバーバルコミュニケーションじゃないんだけど、人と人の関係においてはね、座り方ひとつにしてもそうです(B1)

(8)は、S1で「これ」と述べられているが、指示対象はS2の「座り方」で、後方にある。文科系講義の特徴は、次の二点である。

Ⅲ 文科系の特徴—① ソ系指示語の多様

② 後方照応

4-3 調査結果のまとめ

ニュース番組と大学講義の照応関係のパターンを観察した結果、それぞれに特徴が認められ、ニュース番組と大学講義という形式的な要因だけではなく、同じ大学講義でも、理科系と文科系という異なる内容では、それぞれ特徴的な傾向が認められた。これは重松／長谷川の指摘するニュースと大学講義といったテキストの種類だけではなく、理科系内容と文科系内容といったテキストの伝達内容によっても表現形式が変わることを意味している。

また、指示語に関してはある特徴が見つけられた。大学講義において、コ系ソ系は照応関係を持つ一方で、ア系指示語のみ照応関係を持たないのである。ア系指示語自体は、講義の中で多く用いられたのだが⁽⁶⁾、(9)のように、照応関係を持っていないものが多い。

(9) 奇妙な論理っていう本ですけどね、あのあれです。(B1)

上の例のようにア系の多くは、言い淀みや埋め込み表現化して、指示対象がないものが多い。こうした表現は、例えば英語では、'well'や'you know'の字義を離れた用法に通じるもので、Stubbs(1983: 68)を援用すれば、統語的に命題に影響を与えない発話である。つまり照応関係の観点からは、ア系の指示語は指示対象を持たない、いわゆる間投詞の機能に属する傾向がある。

以上の観察をまとめたものが、次の図4である。

テキストの種類	特徴的な照応関係
ニュース番組の特徴	1 同一名詞の繰り返しの多用 2 ソ系・ア系指示語の非使用
大学講義理科系の特徴	コ系指示語の多用
大学講義文科系の特徴	1 ソ系指示語の多用 2 後方照応

図4 テキストの種類と照応関係の多く見られるパターン

5. まとめと今後の課題

本稿では、ニュース番組と大学講義の照応関係を観察した結果、ニュース番組と大学講義といったテキストの種類だけではなく、理科系内容と文科系内容といったテキストの伝達内容によっても表現形式が変わることを、実証的に明らかにした。ニュース番組では、比較的限定された種類の照応関係だけが認められたが、大学講義の特に文科系では多種多様な関係が見られた。

大学講義の文科系で、接続語の前にゼロ記号が現れる $[\phi \rightarrow \text{名}]$ 、 $[\phi \rightarrow \text{こ}]$ 、 $[\phi \rightarrow \text{そ}]$ などのパターンが見られたことに関してだが、「けど／が」の環境で、このように現れたが、S1のさらに前文において、すでにその内容が明示的に述べられている可能性もあり、そのため、S1ではゼロ記号で述べられ、S2で再び明示的になった可能性もある。文科系のテキストは複文やねじれ文などもデータから多く観察できたことから、これはテキストの長さとの関係を考慮しなければならないが、この点については結論が出ていない。

また、今回は接続語「けど／が」を取り上げたが、他の接続語からの調査も必要だと考えている。

【注】

- (1) 詳細は金久保・金・本田・松崎(1993)参照のこと。構造工学および言語学が、それぞれ理科系、文科系の特徴を現しているかについては、より細かな調査が必要だと考えるが、データとした言語学の講義は、同じ言語学でも、計算式や記号化を目指したのではなく、国語学や文献学を基にした講義内容である。
- (2) 「けど」については「けれども」「けども」などのバリエーションがあったが、「けど」としてすべて取り上げた。
- (3) 三上(1960)以来、助詞「は」には、ピリオドを超えて述部と結びつく機能が認められているため、 ϕ が当然だと考える立場もあるが、「初版本はケースに入ってるんですけども、今(それは)なくなって」のように「それは」を加えても表現できるため、本研究では、用いられた言語事実を重視する立場をとる。
- (4) 語と語の関係に関しては、同一指示、同一外延、同一分類の三種類が考えられる。「第2章」と「第3章」は、無関係と言い切ることはできないが、本稿ではこうした関係を、語彙的な関係のうち、同一外延にあるものと考え、照応関係はないので無関係と処理した。詳細はHalliday/Hassan (1985 邦訳1991)。
- (5) 本調査でゼロ記号(ϕ)を認めるに当たっては、述語との結合価(村木1991 p.143)を基準とした。例えば、述語「開ける」に対しては、動作主と対象が必要不可欠であるが、この必要不可欠な要素が、ゼロ記号

となっている場合を、 ϕ と記述した。

(6) 山本(1993)で、本発表と同一資料での指示語の分析を進め、コソアの使用頻度を次のように報告している。

表4 大学講義で使用された指示語の実数

コソアの使用頻度数	コ系指示語	ソ系指示語	ア系指示語
文科系	1116	1332	985
理科系	2095	600	535

【参考文献】

アンドレイ・ベケシュ(1987)『テキストとシンタクス』くろしお出版

金久保紀子・金仁和・本田明子・松崎寛(1993)「講義の日本語における理科系・文科系の特徴」
『日本語教育』80号

久野 瞳 (1978)『談話の文法』大修館書店

重松淳・長谷川恒雄(1987)「講義の聴解指導」『日本語教育』64号

西原鈴子(1990)「日英対照修辞法」『日本語教育』72号

三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版

村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

山本幸子(1993)「指示語「コ・ソ・ア」に関する考察」

『講義の日本語における理科系・文科系の特徴 I』筑波大学文芸・言語研究科石田敏子研究室

de Beaugrande, R. and Dressler, W.U.1981. (邦訳 池上嘉彦他1984) *Einführung in die Textlinguistik*

Tübingen: Niemeyer. 【テキスト言語学入門】 紀伊國屋書店

Givón, Talmy 1989. *Mind, Code and Context* London : Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

Halliday, Michael.A.K.and Hassan,Ruqaiya 1989. (邦訳 笈壽雄1991)

Language, context and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective

Oxford: Oxford University Press. 『機能文法のすすめ』大修館書店

Stubbs, Michael 1983. *Discourse Analysis* Oxford :Basil Blackwell.

付記

本稿をまとめるに当たって、本学砂川有里子先生には、御助言をいただきました。尚、本研究は平成8年度文部省科学研究費奨励研究(課題番号:0110)の一部である。

【資料1 NHKニュースの数値】

N1:2月6日 N2:2月7日 N3:2月8日 N4:2月9日

表中文字について	
名	名詞
違名	違う名詞
こ	コ系指示語
そ	ソ系指示語
あ	ア系指示語
こ名	この/こんな+名詞
そ名	その/そんな+名詞
あ名	あの/あんな+名詞
代名	代名詞
φ	ゼロ記号

	～が～				～けど～				合計
	N1	N2	N3	N4	N1	N2	N3	N4	
無関係	1	0	0	0	6	9	10	4	30
名→名	1	3	0	0	7	6	10	0	27
名→違名	0	2	0	0	3	2	2	0	9
名→φ	1	1	0	0	5	4	6	0	17
名→こ	1	0	0	0	0	0	0	0	1
名→そ	0	0	0	0	0	1	1	0	2
名→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
名→こ名	0	2	0	0	0	0	3	0	5
名→そ名	0	0	0	0	0	0	1	0	1
名→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ名→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ名→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ名→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ名→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ名→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ名→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→名	0	0	0	0	0	1	0	0	1
こ→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→φ	0	0	0	0	0	0	0	1	1
φ→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→代名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
代名→代名	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	4	8	0	0	21	23	33	5	94

【資料2 大学講義の数値】

R: 理科系、B: 文科系

	～けど～				～が～				理系 合計	～けど～				～が～				文系 合計	合計
	R1	R2	R3	R4	R1	R2	R3	R4		B1	B2	B3	B4	B1	B2	B3	B4		
無関係	4	17	4	39	6	3	26	2	101	40	16	24	20	7	4	13	18	142	243
名→名	3	4	1	9	7	0	7	0	31	7	5	1	6	0	3	4	0	26	57
名→違名	1	2	0	6	1	1	1	0	12	2	0	0	1	0	0	0	3	6	18
名→φ	1	4	0	3	0	1	7	0	16	8	12	5	5	0	2	3	3	38	54
名→こ	2	11	2	16	2	0	11	2	46	5	5	2	1	2	2	3	6	26	72
名→そ	0	4	1	4	0	0	6	0	15	13	3	10	10	1	0	1	1	39	54
名→あ	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
名→こ名	1	0	0	0	1	1	2	0	5	0	1	1	0	2	0	1	0	5	10
名→そ名	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3	3	2	0	2	0	1	1	12	13
名→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	2
こ名→こ名	0	0	0	1	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3
こ名→こ	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
こ名→そ	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2
こ名→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	2
そ名→そ	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
そ名→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1
こ→名	0	0	0	2	0	0	1	0	3	6	3	2	4	0	1	7	2	25	28
こ→φ	0	0	1	5	0	0	4	1	11	7	6	4	2	1	0	1	1	22	33
こ→こ	0	6	0	13	5	1	7	0	32	5	1	0	3	2	1	1	2	15	47
こ→そ	3	3	0	1	1	0	1	1	10	4	2	0	1	2	0	1	1	11	21
こ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
こ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	2
こ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
こ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	1	0	5	5
そ→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	1	1	1	0	1	0	9	9
そ→こ	0	1	0	2	0	0	0	0	3	1	2	1	1	2	0	1	0	8	11
そ→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	1	3	2	0	0	2	1	20	20
そ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1
そ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	2
そ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→φ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	2
あ→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→そ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→そ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→名	0	1	0	0	0	0	0	0	1	5	1	2	5	1	3	3	2	22	23
φ→φ	0	0	1	5	0	0	2	0	8	8	7	8	10	2	1	3	2	41	49
φ→こ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	4	0	1	1	0	9	9
φ→そ	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	2	2	0	0	0	2	1	9	10
φ→あ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→こ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	4	0	7	7
φ→そ名	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	2	3
φ→あ名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
φ→代名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
代名→代名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	16	54	10	107	23	9	78	6	303	140	81	75	80	26	18	54	44	518	821